



一面緑の波の中に突如現れる、濃い灰色の、円形の、2階建てほどの建造物。扉は無く、建物の表と裏にあたる部分に、啞然としているように、ただ脱力しているように、ぽっかりと口を開けている。側面には窓も無く、天井に近い側面に、等間隔で小さな四角い穴があいているだけ。ガラスすら入っていない。

中はそこそこの広さがあり、一人暮らしであれば、かなりのびのびと暮らせるだろう。そう測りはしたものの、ここに住みたがる奴なんて、果たしているのだろうか。

いる、かもしれない。が、俺は無理だ。ここでは暮らせない。数えきれないほどの声にならない声に、すでに押しつぶされてしまいそうだ。

響きはしないが、床が鳴る。固く、壁を刺すような音。思わず息をのむ。誰もいないにも関わらず、息を潜める。この感覚を、俺は覚えている。

四角い穴からか細く日差しが差し込み、ただ高く空いた空気に何本もの光の筋を描いていた。あれを全部塞いだら、どれだけの闇になるんだろう。

なにげなく、取りあえず中央まで歩みでて、おもむろに仰ぐ。ひんやりとした空気が、砂埃のにおいをゆるゆると混ぜる。

そのまま前進し、行き着いた壁を、無感情に手の平で軽くなぞる。感じられるのはその冷たさと、壁に掘られた数々の溝。

壁一面を埋め尽くす文字。文字文字文字文字文字文字。

俺は、なんでここにいる？

今、俺の視線の先にある文字は、意味の無いただの模様。俺はこの文字たちを知っている。単純に、母国語だから。それなりの教育は受けてきたから。子の国の識字率は、世界でもトップクラスだ。この国では読める、書けるというのは、普通のことだ。

読めなかったのは、ただ、読む気がなかったから。認識することを拒絶しているとか、そんなカッコいいことを言ってみたい気もするが、そんなものではない。ただ、気力が無いだけ。

眺めていた自分の手が、なんだかぼやけて歪んだ気がしたが、それもまた、気のせいだ。

なんでここにいる。何が欲しかったというんだ。名前を探しにきたとでもいうのか。誰の？知りもしない名前を。誰のって。決してどこかに残ることなんてない名前だ。何を期待したんだろう。何かを見つけても、何も見つけられなくても、結果は一緒だ。俺に微かに光が差しているとして、それを遮るのは、肩車をしてもらっても届かないであろう、あの天井の穴を塞ぐよりも簡単だ。

帰ろう。

勢い良く頭を上げた。気がつけば俯いていた。

探したところで、見つけ出せるわけがないんだ。そうだろう。探そうにも、何を探せばいいかわかららないんだ。

そう。そうだ。帰ろう。

「何事もなく」とはいかないかもしれないが、俺は、今来た道を、多少重い足取りかもしれない

いが、特に大きな問題もなく、無事家に辿り着けるだろう。

そうして俺は、全てを手放す。放棄する。いつものことだ。わかっている。投げかけもせず、投げつけもせず。閉じていた指を広げ、両腕を次第に大きく広げ、全てを手放す。

ふわりと、灰が風に混ざるように、瞬き1つできれいに消えて見えなくなる。それでいい。

俺は、それでいい。

帰ろう。

帰るんだ。

一步、踵を返す。

足が。

地面にめり込んでるんじゃないかと、思わず足下を覗き込んでしまった。そこには、ヒビはおろか傷1つ無く、自分の足より遥か奥の方から、ぼやけた俺が俺を眺めているだけだった。

(つづく)

不自然なまでに大きな扉が、突然目の前に現れた。俺が倍でかかったとしても、腰を屈めること無くくぐれるだろう。一見木製のいかにも古めかしい造りで、凝った模様が掘られている。開ければギィといかにも重たい音が響きそうな、観音開きの扉だ。

俺、帰れるかな。

部屋にしては途方も無く大きな扉を前に、頭の中はそんなことで一杯だった。人は虚をつかれると、それまで浸っていた「深刻」からも、いとも簡単に抜け出せるらしい。

この扉に気づくまでそれどこではなかったということ、認めざるを得なかった。隣を歩く男の話に必死に耳を傾けていた。つもりだった。実際は、たぶん半分ぐらいしか俺の中には入ってきていない。これもまた勿体ないことをしたと悔やむほか無い。

期待と、期待からくる緊張と、その先をまるで知らないという恐怖。これが、さっきまで俺を満たしていたものだ。

ここまで律儀に俺の隣で固い足音を響かせて歩いていた男が、一步、白衣を翻して扉に歩み出た。

左の扉に左手をつき「カサハラテツロウ」と語りかける。その手は、体つきから想像も容易い、枯れかけた枝のようだった。

瞬時に軽い電子音が短く響く。

やっぱり。この木目はただのインテリアか。

静脈。もしくは指紋。そして声紋。複数のコードと、パスワード。いかにも嚴重です、と公言して憚らないセキュリティ。見た目は古めかしい木製の扉だとしても、先端技術を束ねた鋼の扉だ。刃物や爆薬では傷一つつかないのだろう。

それだけ、この奥にしまっているものは「だいじなもの」だということだ。この扉を目の当たりにすれば、誰が見ても明かだ。豪華な造り。見た目に違い、嚴重に嚴重をさらに重ねた鍵がかけられている。だからこういった扉は、さらに奥深くにしまいこむ。存在を知らなければ、その扉に対していつまでも無感情だ。存在を知って興味を持ったとしても、在処を知らなければ為す術は皆無。

ここは、現実社会からもネットワークからも、遠く遠く引き離された場所。

伝えたくないことは、口に出さず、記さず。見られたくないものは、人目に触れさせず、決して外に出さず。解りきっていることだ。

しかし一向に扉は開く気配を見せない。笠原に言わせれば、解除鍵がいるらしい。よほど大事なようだ。

いや、その重大さは俺も知っていた。その話を聞いて俺は、そりゃそうだろ、と思惑の片隅で呟いた。

唐突に訪れた解除鍵は、とてもシンプルなものだった。

「どうぞ。」

何を考える間も無く、俺の思いの全てである「は？」が、口から吐き出されていた。

温度あるものの音。機械を通してはいるが、息を感じる音だった。

扉はギィとは鳴らなかった。床を滑るように、僅かにこちらに押し開けられて、そこで止まっていた。庭に迷い込んだ野良猫を招き入れるような隙間。当然、猫ではない俺は、この隙間を通

りぬけることはできない。

開けて、いいのか？

中途半端に手を持ち上げたままで固まっていると、一步前にいた笠原が、開けられた僅かな隙間に右手を躊躇無く突っ込み、左の扉を軽々と押しやった。このいかにも研究者ですという痩身の男のどこにそんな力があるのか、いや、そもそも必要なのか。そんなどうでもいいことに捕われて、口が半開きになっている俺の顔を、笠原は表情一つ変えずに見遣った。

視線が付いてこいと言っている。何かを考えるより先に、慌てて一步二歩と踏み出した。笠原の背中はずぐに止まり、続いていた俺も足を止めた。

ぱた、と、背後からはまるで本を閉じたような軽い音がした。

あっけない。

出会いも、あの、いかにも重そうな扉も。

当然、この瞬間の俺には、そんなロマンチックに思いを馳せている余裕など無かった。全く無かった。

(つづく)

鳥。

正式には鳥類。卵生の、脊椎動物門鳥綱に属する動物。

しかしこの国で「鳥」と言えば、多くの人々は、まず最初に違うそれを思い浮かべる。

鳥と呼ばれる存在。もしくは、その集団。

得体が知れないものへの恐怖と好奇心が根をはるのは速く、その根は深かった。存在していた期間は僅かにもかかわらず、今も多くの人の中に、畏怖や疑惑、あるいは畏敬や憧憬、何かしらの興味として居座っているようだった。

もちろん前者も存在している。空に。海に。山に。森に。広場に。電線に。

そしてそれらは翼を持ち、大半の種に飛行能力がある。そのため、鳥といえば飛ぶものである、という連想は自然な流れだ。

後者の鳥は、そこから名付けられた。飛ぶもの。

人類は飛行するための道具は生み出したが、未だその身一つで飛び立つことは叶わない。羽ばたくことはできない。それすらできる存在であれ。現実には飛べはしなかったのだが、いつかは、というその祈りを込めて、彼らは鳥と呼ばれることとなった。

進化したヒト。それが鳥。そう言えば聞こえはいいのだろうか。

ここで敢えてこう言うのだから、その真意を推測するのは容易く、その推測通り、彼らは、輝かしい存在ではなかった。

この世界、戦争と呼ばれるものはなかったものの、各国全てが笑顔で、仲良く手を繋いでいるわけではない。口元だけの笑みを張り付かせながら、牽制し合っていた。

戦争はもう起こらない。そんな誰も癒されない笑顔の下、どれだけそう声高に叫んでも、それはなんと素晴らしいことかと拍手を送る人間などいなかった。

兵器の開発は止まらない。もしものため、防衛のため、と、次から次へと新しい兵器を開発し、発表し、そしてときに隠したりもした。

何がもう起こらなというのだ。

全ての国がそう言うのであれば、その兵器で誰から、どこから守るというのだ。ほとんどの国、そのほとんどの国民が、そのスローガンに何の希望も持っていなかった。事実「小競り合い」は、ところ構わず起こっている。が、それはこの国の多くの人間に取っては、キャスターが伝える画面の向こうの話、大変だなあと眉間にしわは寄せても、そのぐらいの話だ。

そんな停滞した空気の中、彼らは突如現れた。そこでは、我が国を含む各国の輝かしい開発の成果に反発する集団が、果敢にも、五年ほど前に最新と言われた銃火器を手に、とある廃校に立て籠って不穏な空気を垂れ流していたのだという。

風のように駆け、躊躇無く跳び回り、彼らは僅かの間に制圧に成功した。機械や武器や交渉術といったものには一切頼らず、突入、完膚なきまでに叩き潰す。とてもシンプルだった。そんな彼らの活躍がとあるニュース番組で特集され、さながら、約束された勝利を背負うヒーローが登場したかのように、この国の人々は希望と興奮に眼を輝かせ、手を叩き、歓声を上げた。

しかし、二度三度とその躍動を見てみれば、一般人の目にも異常であると映った。軍関係者は身近な人物にその異常性を漏らし、その他一般の多くの人々は、自らの違和感と流れてきた噂話というフィルターをモニタにかけ、それぞれの内で黒い黒いもやを膨らませていった。そのもやが、痼りとなったのはそれからすぐのこと。単純だった。直々の発表があったのだ。

鳥は、人体実験を重ねた結果漸く生まれた、兵士を粧った生体兵器である。

そんなあからさまな発表ではもちろんなかったが、煮詰めていって、残ったのはそういうことだった。

各ニュース番組がその事態の特集を組み、各国からの非難の声が届けられ、キャスターは眉間に皺を寄せ、何を言うにも言い淀み、様々な発言が飛び交った。

そんな鳥達、彼らの部隊は、登場も突然なら退場もあつという間、呆気ないものだった。

事故だと発表された。原因など、核心部分は何も解らない発表だった。そして、その事故で鳥達は全滅したという発表は、聞いた人全員の口を半開きにさせた。何故。

今、俺はあの大きな扉の中にいる。そして、目の前には、いなくなったはずの鳥が、扉に似つかわしい、だだっ広い空間に一人、立っている。

こんなにも「ぽつん」という音が聞こえたのは初めてだった。瞬間、その両眼に捕らえられた。

左の眼だけが仄かに紅く光をたたえている。その眼の上と頬の横で、切り揃えられた黒髪が微かに揺れていた。肘から先と、僅かに見えている腿の白さを、黒い服が強調し、古い白黒の映像を見せられているようだった。しかしそれは、あまりにも鮮明でもあった。

部屋に入った瞬間、視界に飛び込んできた紅い左眼は、今はもう髪と同じ色をしていた。

紅眼...初めて見た。

思わず息をのみ、背筋が伸びる。

そうさせたのは、眼のせいだけじゃない。

子どもを象徴するようなおかつぱに、完成しきっていない肢体、大きな眼。そこから放たれる、子どもらしからぬ視線。

なんで、俺はここにいるんだっけ。

好奇心などどこにもなかった。あるのはただ恐れのみ。いっそ、その視線に狂氣的なものを含んでいてくれたら。簡単な話、逃げ出したかった。

何を考えているのか、思っているのか。何も無い。俺が現れたことに、苛立を覚えているのか。奇跡に近い自惚れだが、喜びのようなものを感じているのか。はたまた、その眼の通り何も映していないのか。

この部屋に入って、まだ何分も立っていないはずだか、例に漏れず、この瞬間がとても長いものに感じた。その長い長い沈黙（実際には、ほんの数秒）には耐えられなかったが、言葉を探す余裕なんてない。情けないと思う。しかし

「立ってるだけで精一杯だ。」

自信たっぷりに、俺は、胸を張ってまで宣言した。もちろん、心の中で。

(つづく)

「先日の研修で話した通り、彼女は最後の鳥だ。」

そう紹介された彼女は、意外にも、如何にも慣れた様子で少し小首を傾げ、俺を下から覗き込むようにお辞儀をした。落ち着いている。服装もだし、佇まいも。15歳、ぐらい。だろうか。このぐらいの年齢にしては、異様なほどに落ち着いている。背も高い方ではないだろうか。俺を見上げてはいるが、顎はそれほど上を向いてはいない。何より、白い。兎に角肌が白い。

彼女は横目で笠原を見遣り、納得したように俺の方に向き直ると「カラスです。」と言った。その声。トーンは低いが、特有の甲高さがまだ残っている。

後ずさりしたい気持ちで一杯だった。我慢できずに唾を飲んだ。敬語を使われているにも関わらず、下から見上げられているにも関わらず、この威圧感。黒い。瞳と髪が兎に角黒い。その黒い眼が、もの言わずじっとこっちを見ている。何かを、待っているみたいだった。実際、彼女は待っていたのだが、何度も言うが、この時の俺には一つ先を考える余裕なんて全く無かった。

僅かな間だったのかもしれない。でも、俺には「やっと」だった。

やっと、この沈黙を破ってくれたのは、笠原だった。

「君にも前に話したが、彼も今日から君の担当医の一人に」

「あ」

俺のその、一言とも言えない、どちらかという悲鳴のような一声が、また沈黙を生んでしまった。でも今度こそ、確かに僅かな間だった。

「あ、いや、私は、あの、深山です。あ、や...その.....深山、太一。です。」

彼女は、俺の名前を待っていた。の、かもしれない。しかしあれは、我ながら呆れた自己紹介だった。

「そうですか。よろしくお願いします。」

微笑むでも無く、眼を背けるでも無く、何かしらの感情を露にするわけでも無く、彼女は再び小首を傾げて、真っ黒な髪を軽く揺らした。

次の瞬間、俺は笠原と並んで、さっき来た長い廊下を歩いていた。この廊下はこんなにも白かったのかと、思わず見渡してしまった。男二人の足音が響かずに鳴る。

「これからは君が彼女に一番近い医者になる。」

「は？え、あの...」

あまりに唐突で、眩くかのような笠原の言葉だったので、思わず聞き漏らすところだった。慌てて耳を傾けた。

「私は、チームの誰よりも、自分で言うのもあれですが、経験も、知識も」

「だから、というもある」

「...は.....？」

「相手は鳥だ。たいていの医者や研究者が表す態度は二つ。尋常じゃない興味か、恐怖だ。」

「はあ...。いや、しかし、あの...それでも、何故私なのか...」

「.....君は、成績が優秀だったから、な。」

笠原はずっと前を向いて歩いていた。自らが話しかけている俺の方はおろか、足下すらも気にしていなかった。

それにしてもだ。ただの小児科医の俺を？それも大学卒業後、2年間だけだ。それだけの理由で？再生医学や薬理学、神経学に特化した医師なら、もっと他にいたはずだ。そっちの方が、彼女

のために必要な知識なんじゃないのか。

いや。そもそもこの男は、彼女を治したいのか？それとも、研究をし直したいのか？

俺は、今更ながら「何も」聴かされていないことを知る。

「彼女はああ見えてまだ10歳だ。今年やっと10歳になった。」

「え。じゅ...？」

「だから、小児科でいいんだ。」

見透かされたのかと思った。思わず見ていた足下から目線を上げると、笠原は俺の眼を見て話をしていて。仄かに紅を滲ませた左目が、俺を見ていた。暫くは慣れそうにないな、この紅眼は。

「私は会議があるので、ここで失礼する。今日は身の整理と、この施設の構造を頭に入れておいてくれたらそれでいい。」

「あ、はい。」

「明日はまた、追加の説明も兼ねて案内したいところもあるから、10時に私のところまで来てくれ。」

「分かりました。よろしくお願いします。」

手を体の横につけ、腰を折った。

笠原はエレベーターホールを直進し、俺は真っ白い角を曲がっていくその姿を見送った。その頃には、俺はそれなりに落ち着きを取り戻していた。

このまま、部屋に戻るか。1週間前にここへ来てからというもの、挨拶回りと研修でろくに時間が取れず、部屋はまだ殺風景なまま、備え付けの机の上だけがどんどん散らかっていった。取りあえず、身を片付ければ、気持ちの整理もある程度つくだろう。考えもまとまるだろう。俺はそのままエレベーターで上層へ向かった。ガラスの向こうに見える景色が、黒い壁から緑になり、緑半分青半分になったところで、俺一人を乗せた箱は止まった。

海も空も木々も、きらきらしていた。いったい今日は何が待っているんだろうと期待に満ちあふれた子ども達の瞳みたいだと、ふと思った。

(つづく)

からすの主治医になってから、2ヶ月。極めて順調だった。

主治医といっても名ばかり。俺の仕事は、毎朝、彼女が「学校」へ行く前、10分にも満たない問診だけだった。彼女は健康そのものと言えた。風邪も引かず、月に1度の定期検診も問題無し。情緒面でも日々、気にかけるほどの変化も見られず、怪我をして帰ってくるといったことも無かった。いいこと、なのだろう。

面倒なのは、毎日笠原に報告書を提出をしなければならないことだった。これといった変化の無い対象ほど、報告書に起こし辛いものは無い。笠原からは、どんなことも、大事だと思えないことも、彼女の発言は一字一句と、言われていた。監視役として雇われたとしか思えず、彼女と対面することに対する罪悪感はなかなか拭えなかった。

「発言は、一字一句逃さず。」

俺の問診が始まって8日目。7日間の間、ただ淡々と俺の質問に応えるだけだった彼女から発せられた、最初の言葉がそれだった。

「……え？」

問診も終わり、椅子から立ち上がろうとした瞬間だった。

「え？」

立ち上がることもできず、薄ら笑いを引っ込めることもできず。ただ、間抜けに2回繰り返した。

俺がやっていることは、ただの監視だ。相手は子ども、まして鳥だぞ。気分が良い訳が無い。小児科医は、子どもの味方でないといけないのに。俺は何をやっている。傷つけたか...? いや、それは思い上がりか。腹を立てているのか、俺に。

一瞬で色んな考えが巡った。そしてそのどれもに「赤眼」に対する恐怖感が付きまとった。

「笠原博士から言われているのではないですか、深山先生？」

10歳なわけがないだろう。この物言い、佇まい、威圧感。

「...何故？」

子ども相手にただそれだけしか返せず、恐怖と情けなさで眼をどこにも定めることができないでいると、彼女は軽く「また...」と溜め息をつき、肩を落とした。

「深山先生を責めているのではありません。」

母親に頭を撫でられたかのような感覚。なんなんだ、この10歳児は。反射的に顔を上げると、初めて見る彼女の子どものらしい表情があった。さっき「深山先生を責めているのではありません。」と言ったのは、どの口だ？俺の空耳か？

「え...っと、...え？」

混乱したままの俺のことはさして気に留めず、彼女は「過保護なんですよ。」と続けた。

「過保護なんですよ。笠原博士。報告しするように深山先生にお願いしているのも、別に私の監視をさせてるつもりはないんです。」

「へ？」

「私の監視をしてるって、気に病んでいたんじゃないですか？深山先生は科学者じゃなくて、お医者さんだから。」

「いや...、その.....」

「笠原博士にはきっとそんな意図はありません。先にも申し上げた通り、過保護なだけなんです。だから、深山先生が気に病むことは何もないですよ。」

何も言えずにいると、彼女は諦めたのか、伝えることは伝えたからそれで良しとしたのか、大きな窓際に置かれた勉強机の椅子の背にかけられたリュックを手に取り、肩にかけた。

「学校に行きます。」

「え、あ、そう、そうだね。僕も出ないと。ごめんね、何か今日は、長居しちゃって。」
漫画みたいなやり方をしてしまった。俺が進んで居座った訳ではないのだけど。

「いえ、引き止めたのは私ですから。」

心臓が跳ね上がる、とは、こういうことを言うんだな。

初めて一緒に部屋から出た。

いつもは俺が去った後、登校しているらしかった。

一度、彼女の部屋から出て右に進んだ最初の角で、笠原の部下である宮田という女科学者に捕まった。立ち話をしていたら、さっき聞いたばかりのあの大きな扉が閉まる音と、俺がいる方とは逆方向の扉に入っていく彼女の後ろ姿を見たことがある。後日試してみたら、俺のIDではその扉は開かなかった。そういう場所なのだろう。

「先生は」「じゃあ」同時だった。

「また、明日。よろしくお願いします。」

彼女はそう言って、初めてあった時のように軽く会釈をした。

「うん？何か言うことがあったんじゃないの？」

「...いえ？呼びかけただけです。」

「...そう？じゃあ...じゃあ、また明日、ね。」

「はい。」

読めないな。あの無表情。喜怒哀楽どころか、疑問すらない。「先生は」と、言わなかったか？何か言おうとしたんじゃないのか？

その日、報告書を書きながらも、俺の頭は混乱したままだった。いつも通りの無表情。温度の無い受け答え。その体躯に不釣り合いな言葉遣い。突如現れた、年相応の顔。

あれは、今からやろうとしていた宿題を「やったの？」と言われた時、或いは、子ども達だけで遠出する時にぎりぎりまで「あれは持った？」「着いたら電話してね」「迷ったらまず...」と言われ続けて家を出る時の、子どもの顔。

あの顔で「お医者さん」とは。ただの子どもだ。

「わからないな...。」

思い切り背もたれに寄りかかり、天井を仰いだ。

そもそも俺は鳥の専門医でもなければ、大学で研究対象にしていたこともないんだぞ。そもそも、鳥の情報なんてこの施設内でもごく一部だろ。俺を呼んだのは、笠原なのか？

ぼんやりと壁にかかった時計に目を移す。16時半すぎ。報告書の提出時間は、毎日17時。書く内容はいつもほとんど変わらない。今日も出せる状態には、既になっている。

彼女の「過保護だから」発言は書くべきか。そのことも、モニタを前に1時間もキーボードを打つ手が止まっている原因だった。

(つづく)